

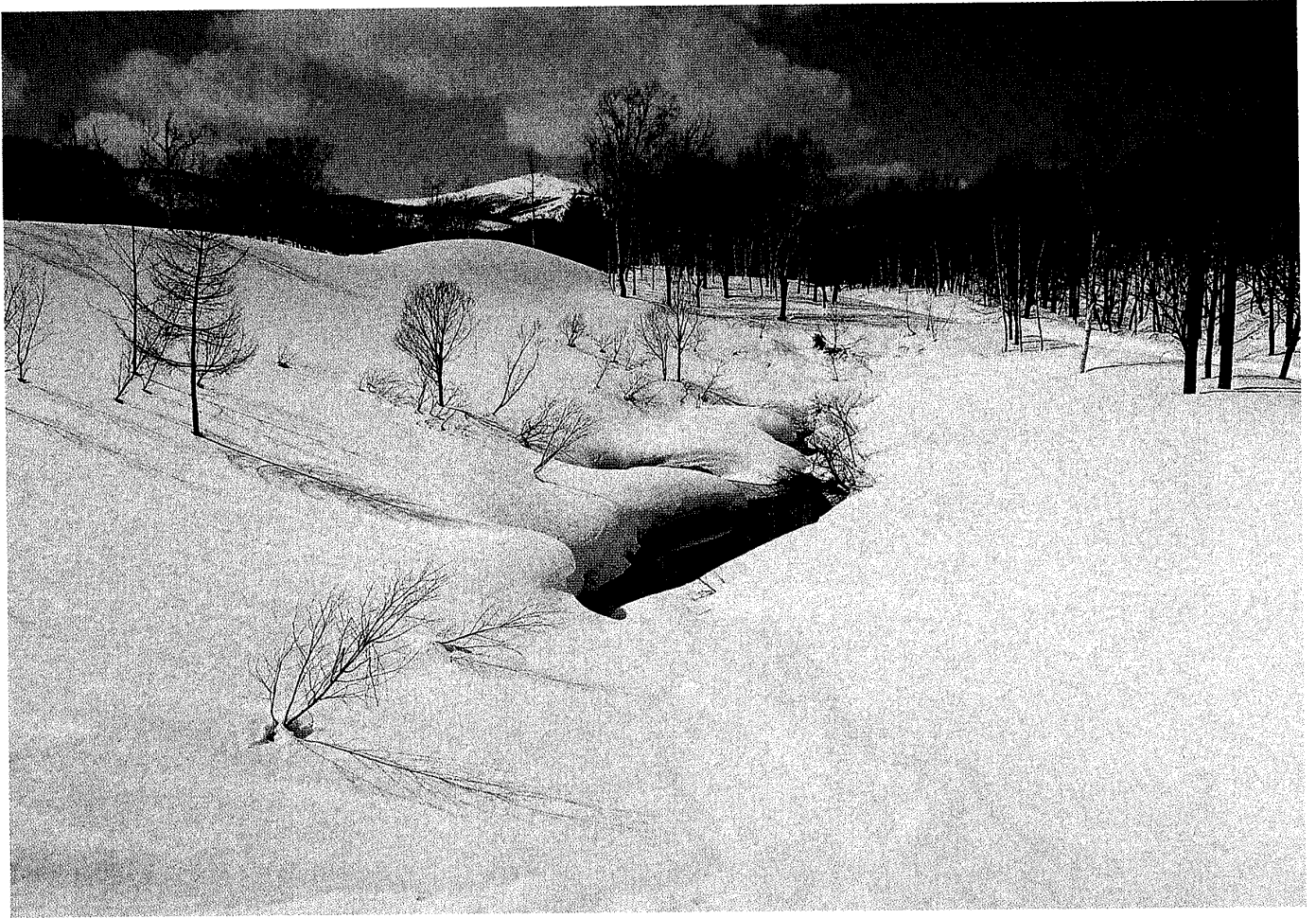
冬の終わりから春へ、そして秋へ (3) (写真)

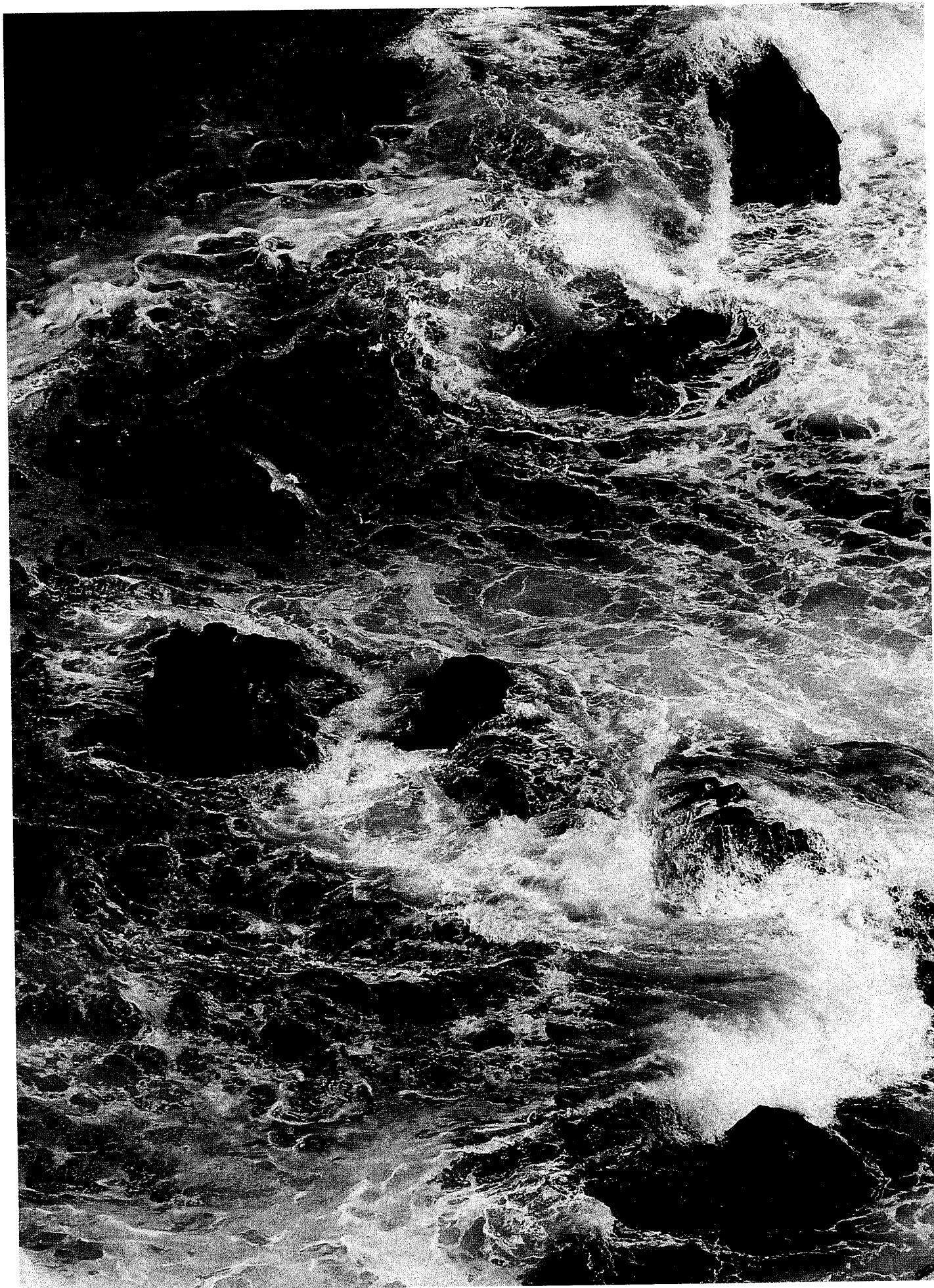
Late Winter through Spring until Autumn (3) (Photograph)

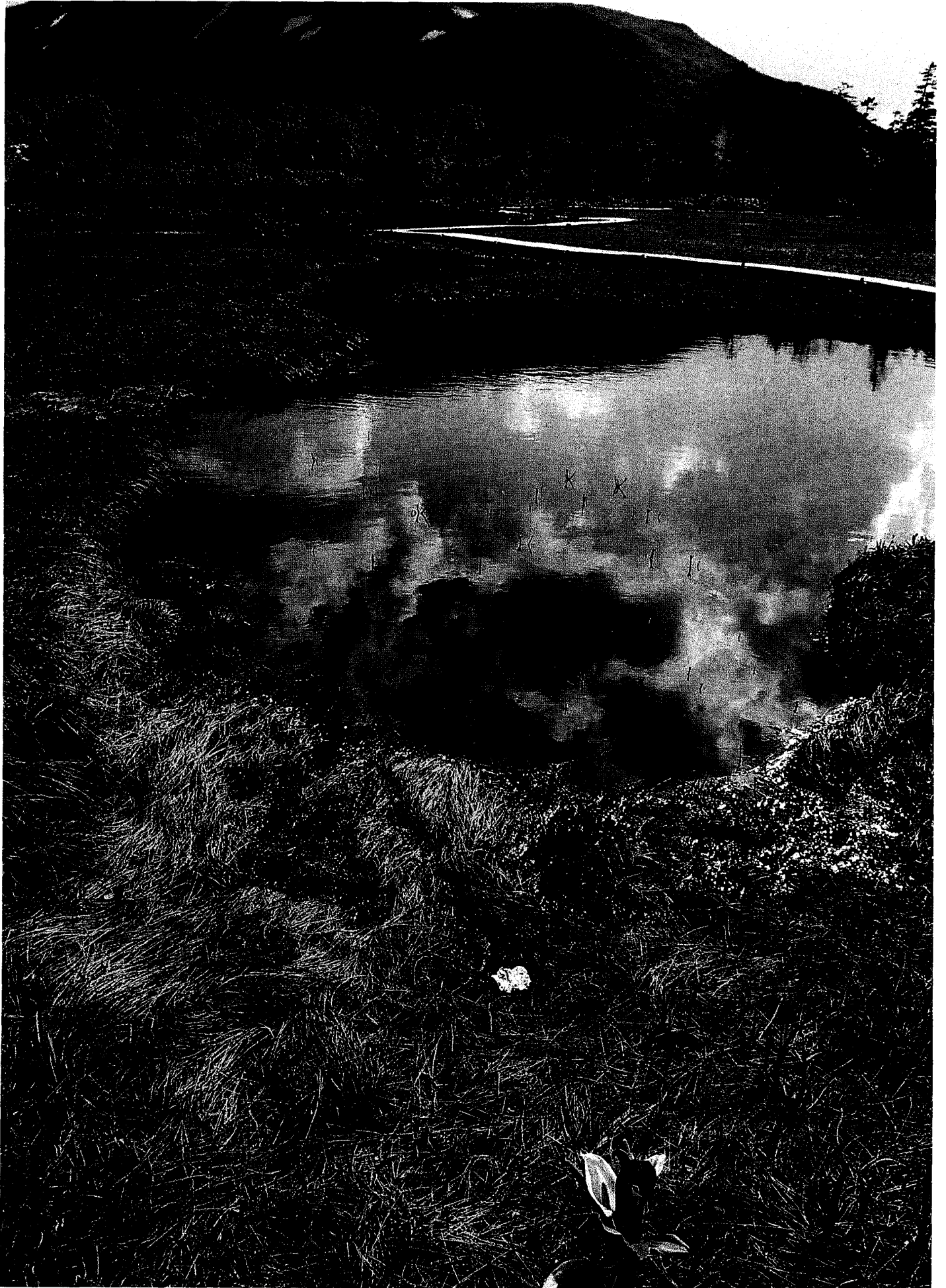
藤 原 等

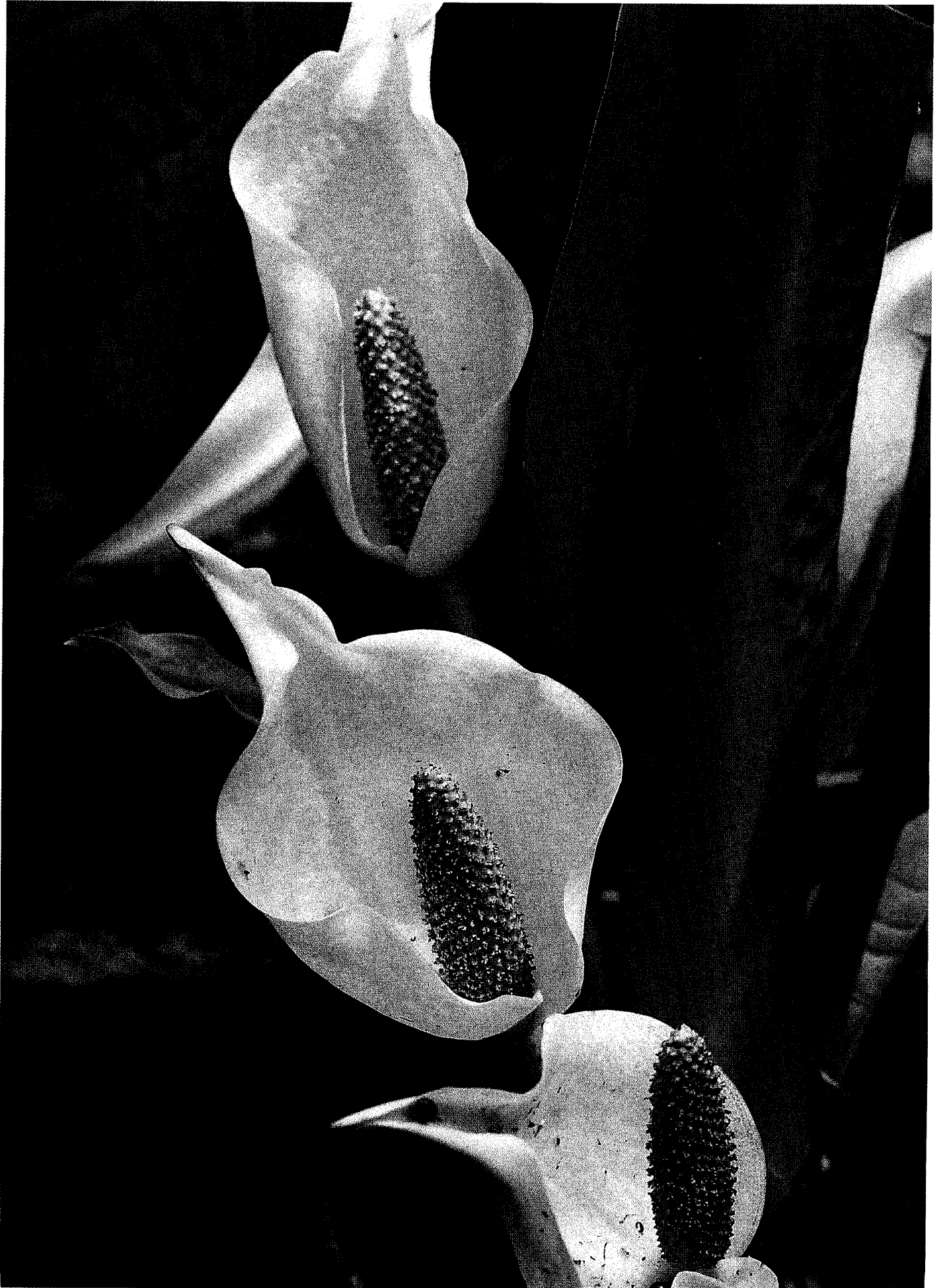
FUJIWARA, Hitoshi

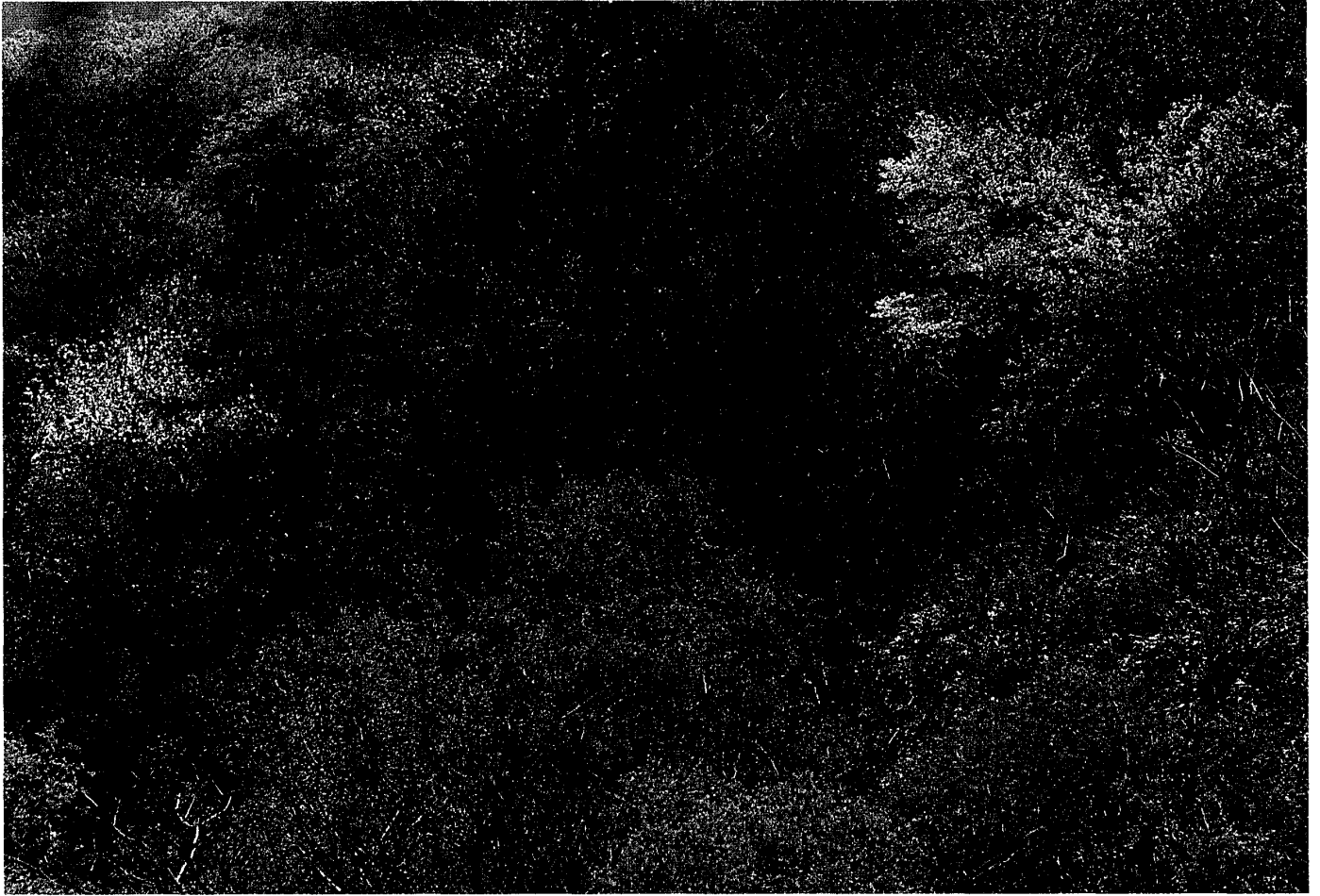




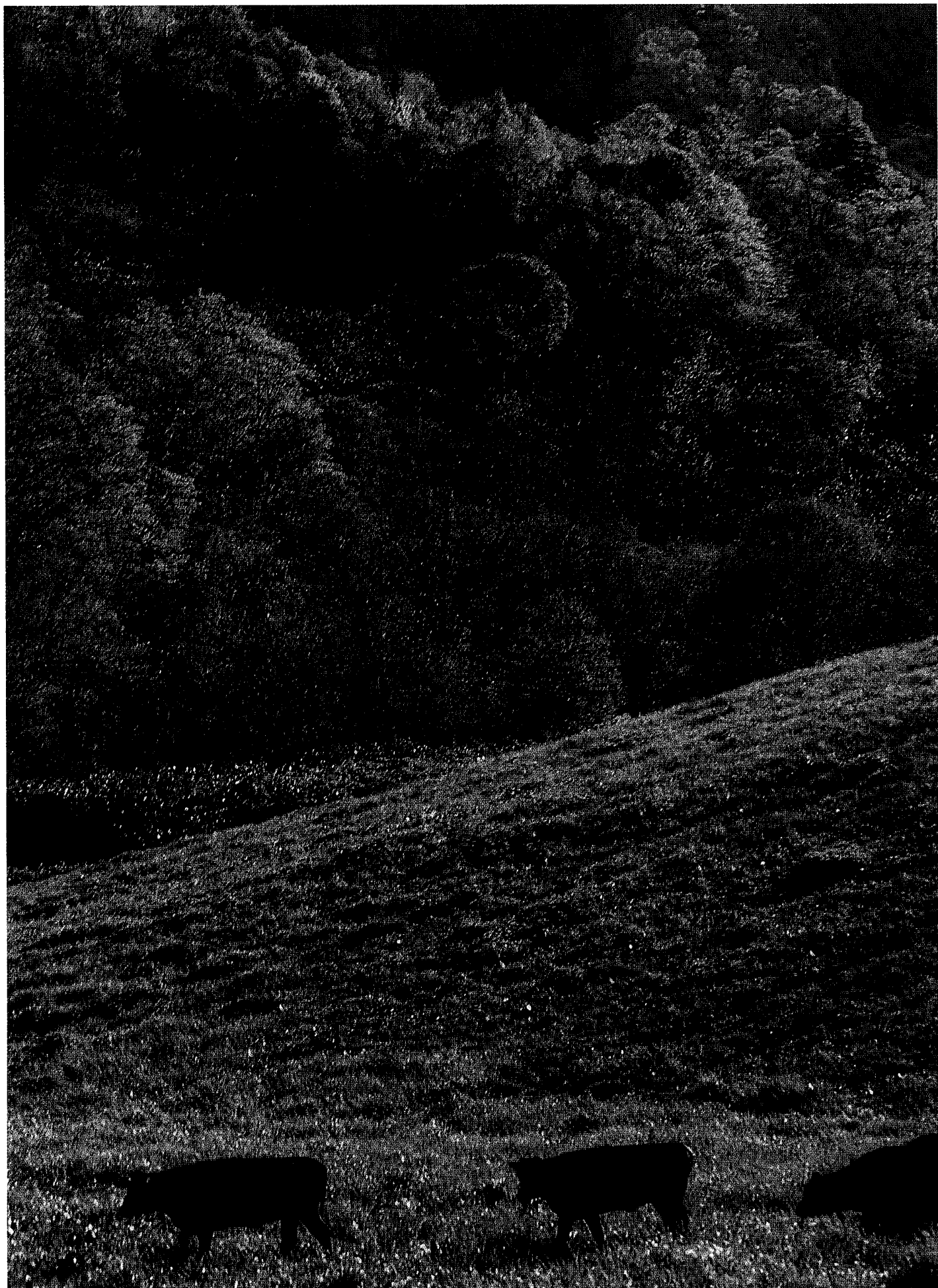


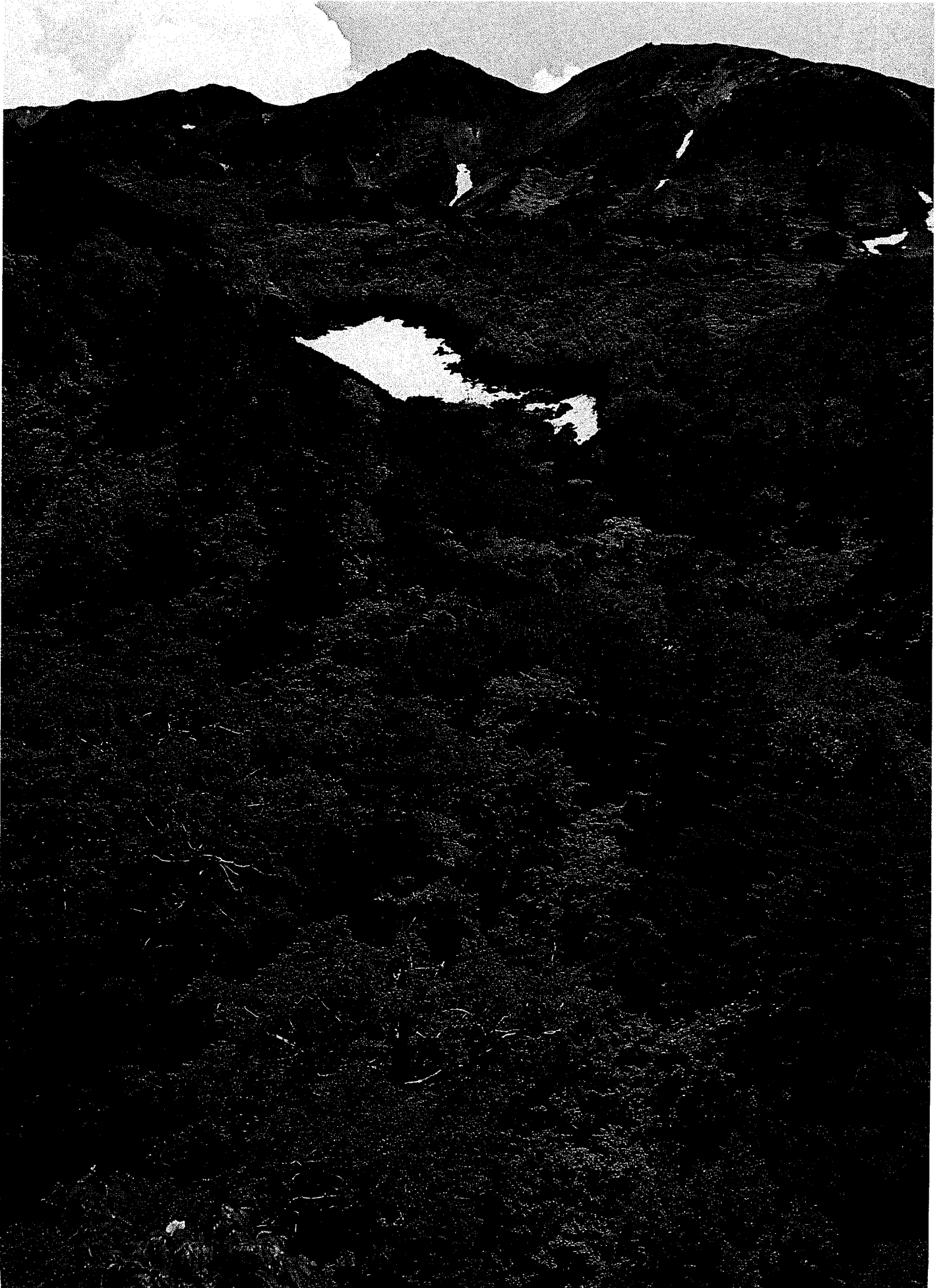


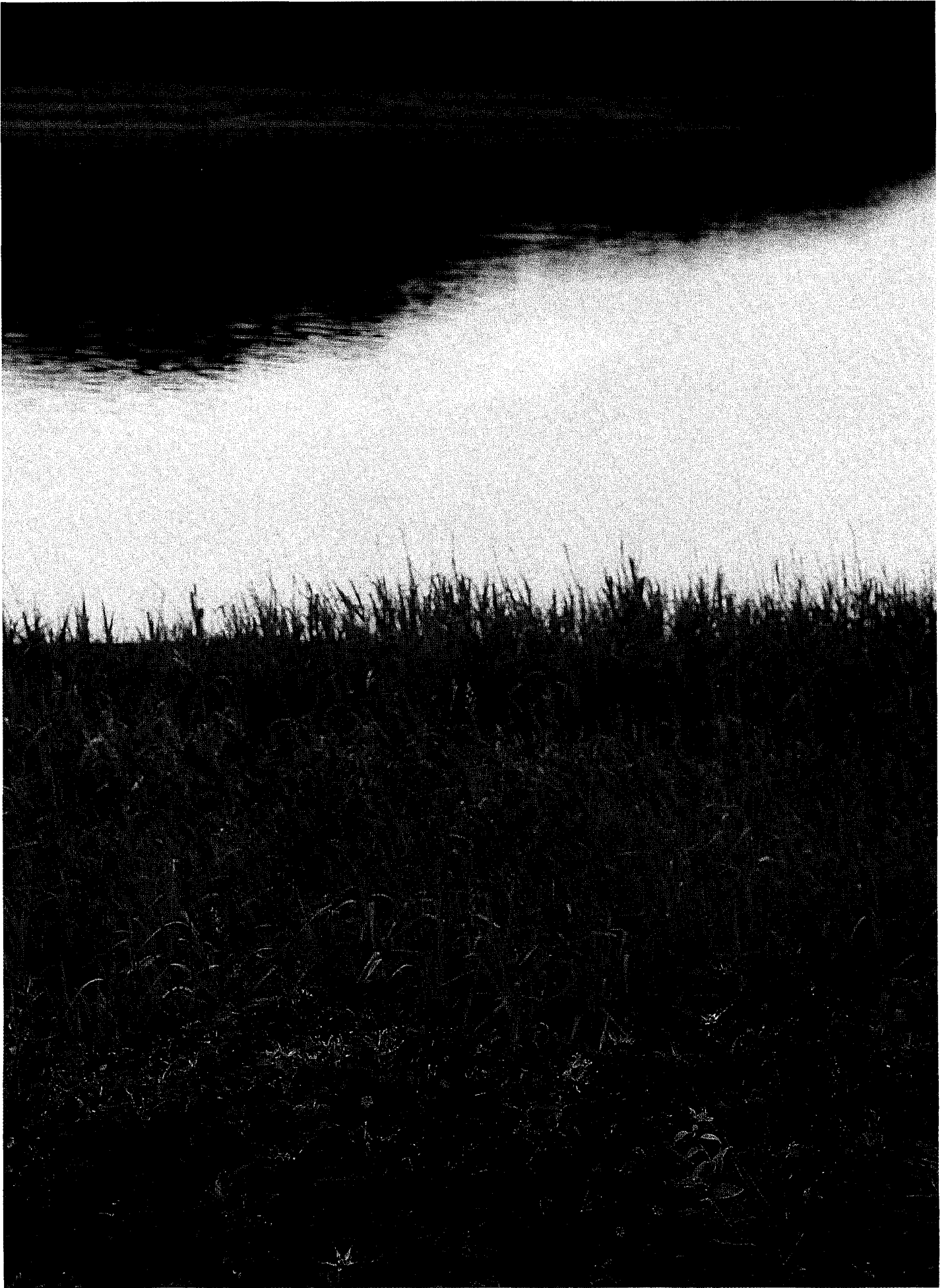


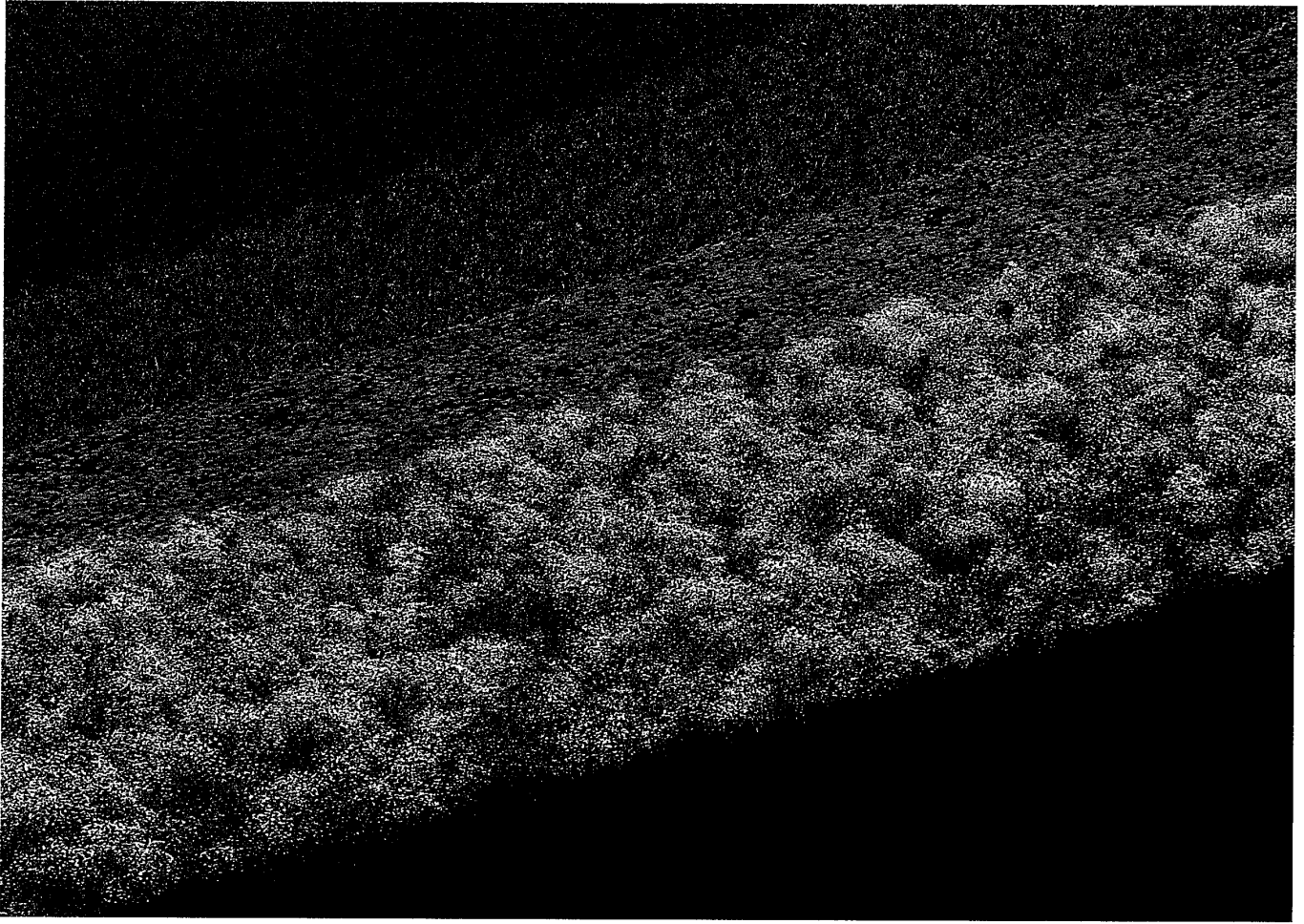




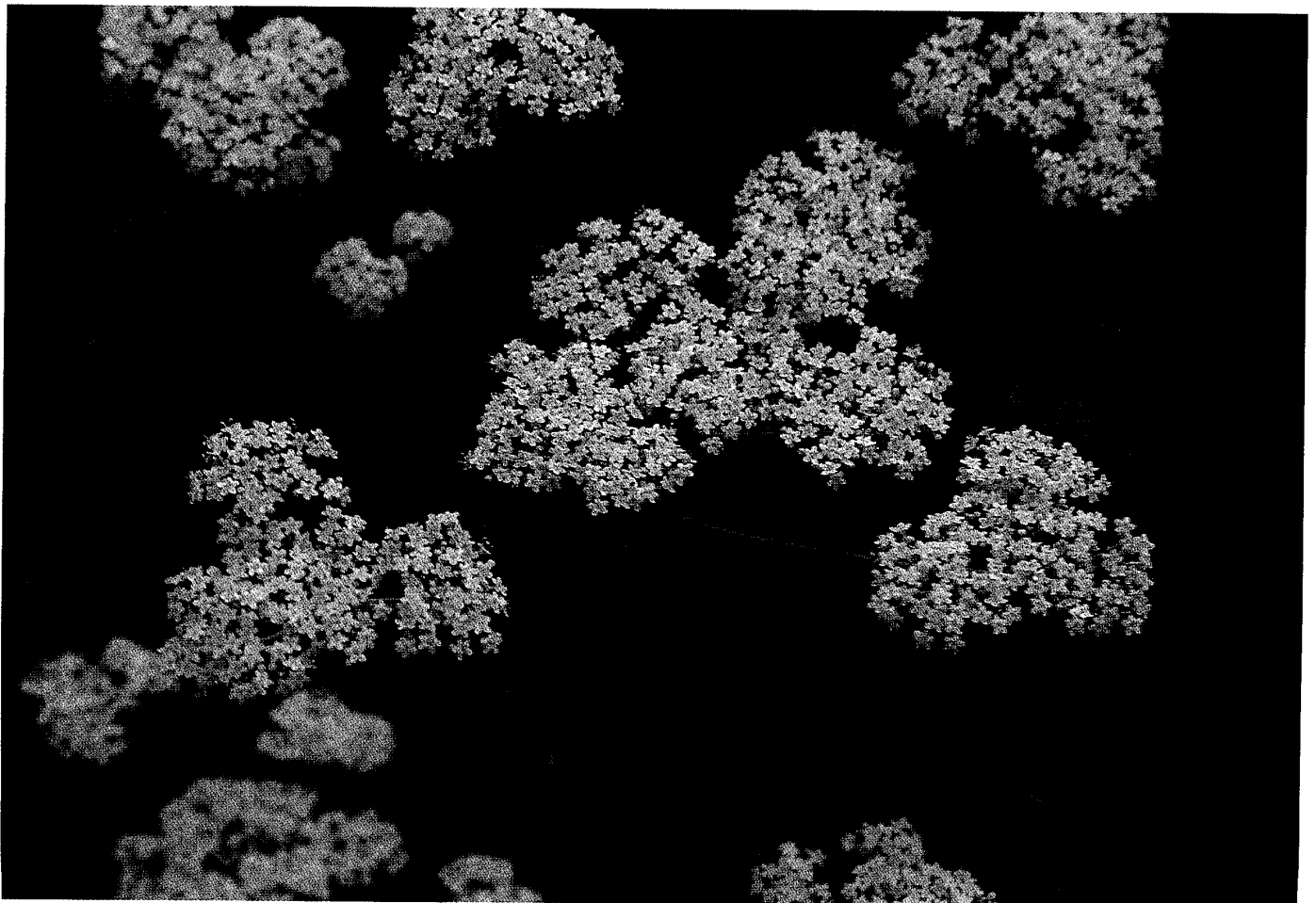


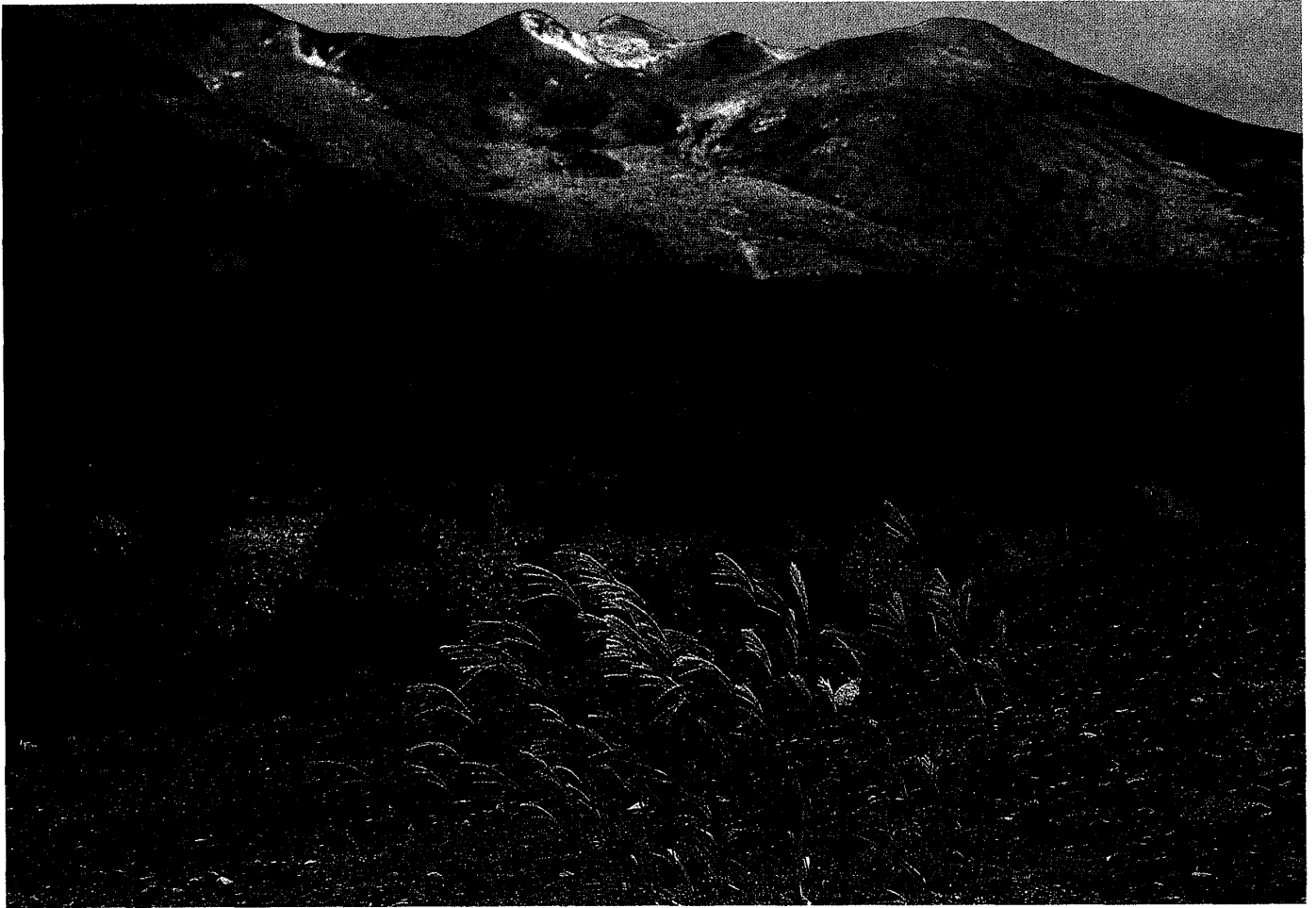


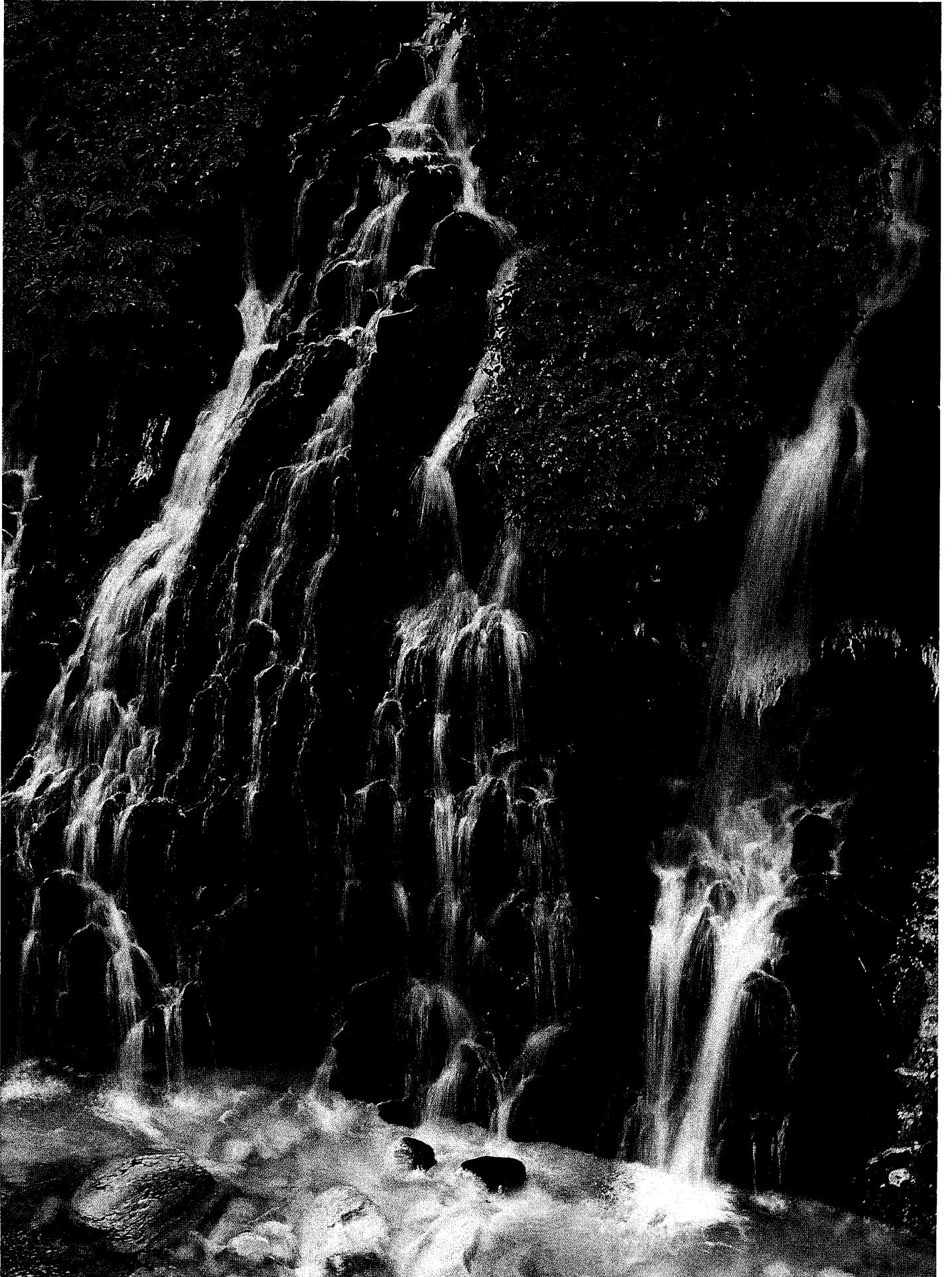












本誌第10号の特集論文として「大学と地域で創る生涯学習活動の研究—後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み(1)(2)(3)(4)—」を発表した。これは、ある意味で本研究所の総力をあげて取組んだ本格的な地域共同活動の成果の部分的紹介となっている。それで、ボクは、2007年3月末日付けで定年退職となった。北海道の西南部に位置する後志地方はどこのまちも財政難から苦渋のまちづくりをしている。小樽市は夕張市他2市町と共に赤字決算に陥った。北海道庁の地方出先機関である後志支庁は倶知安町にあり、後志地方のただ一つの市である小樽市が夕張市の二の舞になろうとしている。この地方の市町村の格差拡大はひどいものがある。今年度の土地路線価の上昇率で全国トップになったのはニセコ。未だ道政の失敗から全国水準の経済状態にもはるか程遠い貧困と地方切捨てで苦しんでいる、この北海道の一つの町の、一つの地区の土地路線価上昇率が全国トップになるという、驚くべきグローバル経済・新経済主義のあだ花が倶知安町比羅夫(ひらふ)の山田地区に咲いているのである。何でグローバル経済・新経済主義のあだ花かといえば、この地区だけがオーストラリアバブルによるリゾート開発で浮かれているからである。ボクは退職してから、4月と5月、7月、9月にこの比羅夫山田地区を含む「花園リゾート予定地」を現地調査している。オーストラリアの不動産・観光業の日本支社「日本ハーモニー・リゾート」(本社・東京)は、約600~650億円を投下して2006年夏には建設に着工し、2007年冬には部分開業する予定であった。それがまったく手がつけられていないのである。建設の建の文字も見えないのである。2004年頃から倶知安町在住のボクの研究協力者と共同調査を開始していたのだが、情報を総合するとこの計画のすべての資金はオーストラリアからの資金ではなく、日本で、それも地元倶知安町を含む北海道での調達を執拗に追求していたようである。そして調達に失敗した。すでに投資した北海道民がいるかは現時点では何とも言うわけにはいかない。謎は、なぜ日本で全資金の調達を計画したのかである。そしてまた、この日本ハーモニー・リゾート社は、9月15日、持っている株の全部を香港の「パシフィック・センチュリー・グループ」(PCG)に売却したのだ。売却は8月下旬の様子で、地元倶知安町の行政や関心を持っている者が知ったのが9月13日という恐ろしさである。日本の、北海道の、倶知安町のすぐれたニセコという自然景観の土地が、国際資本に食い荒らされ、いとも簡単に所有権がオーストラリアから中国香港へ転売されたという事実。これで地域は活性化するのであろうか。生涯教育学の学域が地域活性化の問題も含まれるとするならば看過できることなのか。PCG社は、香港の大富豪、李グループの中核企業で通信、IT、不動産業が主要業である。李グループは利益の出る事業を見つけては買収し転売するというこれまでの実績からして、このオーストラリア人の真面目なニセコ地区の自然を愛する行いと、そこに刺さり込むオーストラリアのグローバル経済主義・新経済主義は背反し、競争原理で食い荒らされ虫食い状態に陥れられている。それでもいくらかの「地元雇用」につながるというバブルのような夢を行政は見ているわけだが、何時の時代から日本人はそんな軟になってしまったのだろうか。そして、その後始末は、結局地元の行政や地元の地域住民にさせられることは必然であろう。この物語はそんな怒りの中で撮影した作品群である。'07.10.5.記。